

「今、私の晴雨計は！」①

「七十歳になってわかったこと1」

平山征夫

昨年七月古稀に達した。それ以来「七十歳になって分かったこと」って何だろう」と考えてきた。そしてそれを書くこうと思った途端、水墨画家篠田桃紅さんが「一〇三歳になってわかったこと」という本を出版されベストセラーになった。どんなことが分かったのかインターネットで検索したら「生まれて、死ぬことは考えても始まらない」「自らの足で立っている人は、過度な依存はしない」など含蓄深い言葉が並んでいた。気後れしてしまった。この検索で分か

ったのは篠田さんのほかにも百歳超の高齢女性の出版が沢山あることだ。「一〇〇歳の幸福論」（一〇〇歳のフォトジャーナリスト笹本恒子）、「あら、もう一〇二歳」（俳人金原まさ子）、「一〇四歳になってわかったこと」（ハワイの名物食堂の元看板娘手島静子）、「一〇七歳生きるならきれいに生きよ」（山田耕作の一番弟子の声楽家嘉納愛子）など・・・でも極めつけは、後藤はつのさんの「一一歳、いつでも今から」だ。七十三歳から油絵を始め、一〇九歳まで描いていたというから、七十五歳で始め一〇一才まで描き続けたグラン・マザー・モーゼスの日本版だ。驚いたことに後藤さんは妙高赤倉温泉の人だ。しかも

ポケ防止で絵を始めた動機が、若い時近くに住んでいた岡倉天心宅に豆腐を配達に行って、お茶を御馳走になるなど可愛がられた思い出があったからだという。女性に比べて男性は少ない。日野原重明さんくらいだ。どうしてこんなに寿命に男女差があるのだろうか。これは私がライフワークの研究テーマにしている「女性は何故鬼婆化するか」に加えるべきだと思った。何故なら、私が傑作と高く評価しているサラリーマン川柳「耐えてきた」という妻に耐えてきた」で分かるように、年齢と共に女性ホルモンが減退し鬼婆化する妻からのストレスに男は耐えてゆく、それが寿命の差になっているのではと直感的に思

ったからだ。（このくだりはあくまで一般論）これには女性側から反論倍返しがあるのだろうが・・・。若輩！七十歳ながらそれでもこの歳で分かったことをやはり書いておこうと思った。私の予想寿命ではいくら待っても百歳には敵わないからだ。詳しくは次回に譲るとして、いきがってみたけれど、実は分かったことは「いくつになっても若い女性への関心は変わらない」くらいで、結論は「七十歳になっても分かったことはなかつた」、すなわち「人間幾つになっても分からないことばかりだな」ということだったからだ。そして私は明日七十一歳になる。

（H二十七・七・二十）